

日本で2番目に古いスッポン養殖の話 ～福田養魚場 福田泰昌氏 聞き書き～

後藤康人

133-0056 東京都江戸川区南小岩5-21-11-503 えどがわ生物懇話会

About the aquaculture soft-shelled turtle which is the second oldest in Japan: A verbatim record from Mr. Yasumasa FUKUTA (FUKUTA Yogyo-Jo).

By Yasuhito GOTO

EDOGAWA Social Meeting on Biology, 5-21-11-503, Minami-Koiwa, Edogawa, Tokyo, 133-0056, Japan.

1. はじめに

日本の養龜(ヨウベツ/スッポン養殖)は1879(明治12)年創業の服部中村養龜場(創業地は東京都江東区. のちに静岡県浜松市へ移転)を草分けとする(秋山, 2005). これに続くのが1896(明治29)年創業の福田養魚場(鳥取県鳥取市)で, これは西日本では最も古いものである(大村・栗橋, 1927). 日本国内のスッポンの自然分布は不明な点が多く, 養殖個体の逸走や放逐の可能性が指摘されてきた. 筆者はかつてその歴史背景の理解に少しでも役に立てばと考えて養龜経営体の歴史を調べていたが, その過程において福田養魚場3代目経営者である福田泰昌(フクタ ヤスマサ)氏の知遇を得た(後藤, 2015). 氏は長年にわたり地元地域の振興に取り組んだ地方議会議員という一面を持つ経験豊かな淡水養殖業者であり, そして真摯に自然と向き合うナチュラルリストだった.

2. 福田泰昌氏について

福田泰昌氏は家業である養魚場を営みながら鳥取市議会議員として四半世紀近く地方自治に携わった. 氏の略歴を記す.

1931(昭和6)年7月	鳥取市内に生まれる.
1951(昭和26)年3月	鳥取大学農学部卒業.
1972(昭和47)年4月	鳥取市松保地区公民館長就任.
1986(昭和61)年12月	鳥取市議会議員初当選.
1998(平成10)年12月	“ 副議長就任.
2001(平成13)年11月	“ 議長就任.
2010(平成22)年12月	“ 議員任期満了. 勇退(6期24年間).
2011(平成23)年11月	地方自治功勞により旭日小綬章受章.
2016(平成28)年2月	肝不全のため死去. 享年84歳.

なお, 旭日小綬章を受章した際のリーフレットには「生涯現役を目標に, 鳥取の豊かな自然の中で, 祖父の代から始めた淡水養殖業(鯉, スッポン)に勤しんでおります」とある. 短いながらも家業の養龜に対する誇りと意欲が窺える.

3. 福田泰昌氏 聞き書き

日本で2番目に古いスッポン養殖場の創業者が鳥取県出身であることを知り、県の農林水産部に問い合わせたのは2012(平成24)年10月のことだった。その際に3代目経営者である福田泰昌氏をご紹介いただき、電話や信書で遣り取りを始めた。鳥取市内の養殖施設を見学させてもらったのが2013(平成25)年5月19日。その日は見学のあと福田氏宅で話を伺った。以下はそのときの記録である(括弧内は筆者が補足説明として加えたもの)。

「創業者と福田家」

福田養魚場の創業は明治29(1896)年。祖父の福田源衛(フクタ ゲンイ, 1881-1953)が始めた。地元の村会議員をやるなど地域振興に努めた人だった。因伯人物誌(山口, 1951)にも載っている。2代目が父親の福田源太郎(フクタ ゲンタロウ, 1902-1988)。ワシ(福田泰昌)が3代目で、息子の範史(ノリヒト)はいま公務員だが、継いでくれることになっているので4代目になる。

「現在の福田養魚場の規模」

むかしは3町歩ほどあったが、いまは1町歩(1町歩=約1ヘクタール)ほどだ。イケ(養殖池)の数はタネオヤ(種親)用に1面。そのほか成長サイズによってチガメ(稚亀)用、ワカガメ(若亀)用と複数ある。従業員は家族だけ。このあたりはウチ(福田家)といい、キタワキさん(北脇永治, 1871-1950。1904(明治37)年に鳥取に初めて二十世紀梨を導入した人物)といい、どういう巡り合わせかはわからないが、開拓者精神に富んだ土地柄のようだ。

「創業の経緯」

郷土の人々(鳥取県中学校教育研究会道德部会, 1970)に詳しく載っているが、ジイサン(祖父である福田源衛)は若くして父親を失ったため画家の道を諦めて商売に専念した。まず養鯉を始めたが、コイの稚魚は自ら大和郡山(奈良県大和郡山市。江戸時代から続く金魚の養殖で知られた土地)へ買い付けに行って自分で運んでくるほど熱心だった。その次に始めたのが養黿。スッポンに目をつけたのは値段が高くても需要も見込めたからだ。もともと生きもの好きだったし、当時はみんな貧しい食料事情だったので、何とか良好なタンパク源を確保して提供することが狙いだった。

「スッポンをどこから仕入れたのか」

地元ではない。オジ(叔父)が小浜水産学校(現・福井県立小浜水産高等学校。日本で最初にできた水産高校)出身で、それが縁となって小浜からタネオヤを仕入れたと聞いている。

「当時の日本国内のスッポン養殖」

日本で最初に養黿を始めたのはハットリさんのところ(現・株式会社服部中村養黿場)。ウチは国内では2番目で西日本ではいちばん古い。佐賀のフジワラさん(詳細不明)のところと3軒が先駆的な存在だ。当時ノウハウは門外不出。ジイサンは服部倉治郎(ハットリ クラジロウ, 1853-1920。服部中村養黿場の創始者)さんに教を乞うて軌道に乗せた。ただ実際のところそう易々と秘伝を教えられるわけがない。試行錯誤を重ねた結果だ。子どもの頃ジイサンにヨソ(他所)の養黿場に連れて行ってもらったときに、「どうぞどうぞ」なんて言われて入ったらドーベルマン(番犬)がイケの周りに放たれていて一歩も近づけなかった思い出があるよ。口では「さあさあ、ご自由にご覧になっていってください」なんて言いながらだよ。幼心に恐かったし、それくらい厳しい企業秘密だったわけだ。

戦後しばらくはチョウセンマル(朝鮮半島産スッポン)が多く大阪に輸入された。スジ(筋)が多くてミ(身)の量が少なく、アブラ(脂)など国内産に比べてずいぶん味は落ちたが、労働者が精をつけるためによく食べていた。朝鮮や台湾から輸入されたスッポンは日本の料亭では使われない。料亭は肉質にこだわっているので国内の養殖モノ(養殖スッポン)を使う。それと、輸入モノ(輸入スッポン)とともに感染症も入ってきた。ヨソはオタフク(オタフク病への対処)でずいぶん苦労したようだが、ウチは自家繁殖なのでほとんど影響はなかった。

昭和30年代(1950年代後半)に入ってゴルフが一大ブームになった。そうすると夜の料亭での接待より昼のゴルフ接待のほうが健康的だったことで業界はだんだんしぼんでいったよ。

「近年のスッポン養殖事情」

スッポンは産卵・孵化から出荷まで4~5年かかる。事業を始めてその年のうちに出荷できない商売なので基本的に回転が遅い。相当な資本がないと回収まで間もたない。逆に家族経営ならば細々と続けられるわけだ。最近じゃ輸入が多いが、料亭で出されるようなスッポンは輸入モノではないはず。そういうものはおそらく健康食品やサプリメントに使っているのだろう。

養黿業の実態は一次産業で現代的な経営は難しい。一次産業は自然環境に左右されやすい。しかも一毛作(1年に1度の収穫)だからいまどきのビジネスとしては効率が悪い。さらにそれから先の商売、つまり二次になると、スッポンの取引は買い手市場。買い取り側が値段を決めてくる。いずれにせよ厳しい。ウチは料亭に直に卸しているので自分でやる分には何とかやっている。公務員の息子のために設備を整理しながら、いまは縮小しているところだ。

「スッポン養殖の1年」

カメはデカンショで暮らすもの(民謡デカンショ節に「あとの半年寝て暮らす」という歌詞あり)。季節の移り変わりをよく観察しながら育てることが大事。例えばイケの周囲にいるカエルやヘビの様子を見ながら、それに合わせてスッポンの世話をする。「阿呆の鳥飼」(内田百間の随筆集)じゃないが、ブロイラー(鶏)を飼うようなつもりで和鳥を世話したらダメで、野生の生きものを飼うにはその生態をよくよく理解していないと。ウチは裏山からの湧水を引いている。恵まれた環境だ。餌はむかしは養蚕で糸を取ったあとと不要になった蛹を使ったり、小魚を使ったりしていたが、いまは人工飼料を使っている。

タネオヤのイケにはオス・メス各数十頭入れているが、正確な頭数は把握していない。死んでしまった個体や老齢の個体が目につけば入れ替える。前年11月から明けて3月くらいまでが冬眠時期で、起きだして水温が上がる4月に交尾をする。毎年5月下旬に初産卵があって1シーズンで3回産卵する。1回に20から30卵くらい。具体的には5月26日頃が初産卵の目安で、それから盆のあたりまでが産卵時期。そしてお盆の頃に孵化が始まる。イシガメならばそのまま潜って次の春まで土中で過ごす。スッポンは子ガメのときから水中で過ごす。出荷は3~4歳の個体。スッポンがうまいシーズンは冬で、10月頃には餌止めして腸の中が空っぽになって、それでいてアブラがついている。マル鍋が最高だ。体がぼかぼかしてくる。

「良いスッポンを育てるには」

炎天下に甲羅干して、泥の中に潜ると、それを繰り返すのが自然の状態。そのような環境を再現してあげれば皮膚もきれいで健康なスッポンができる。ただこういったことは頭だけの理解ではだめ。知識は教えてあげることもできるが、五感を使って自然の移り変わりに敏感に世話をしないと。生きものを育てる

のは24時間365日のことで、会社のように定休日などと言ってられない。「天気がおかしいな」と思えば夜中だろうがイケに足を運んで様子を見る。サラリーマンのような感覚で「タイムカードを押したあとだから知りません」というわけにはいかない。養籠が個人経営ばかりなのはそういう理由もあるからだろう。

4. 結びにかえて

「そろそろ自分のことを文章にでもしておこうかと考えていたら、県(鳥取県農林水産部水産振興局水産課)から電話が入ってアナタ(筆者のこと)が会いたがっていると聞いた。不思議なことがあるなと思っていたところだった」と、初めての電話で気さくにに応じてくれた福田泰昌氏。養籠の詳細はもちろんのこと、市議会の重鎮で地元の名士であることさえも知らなかった筆者に対し、惜しげもなく様々なことをご教示くださいました。ご存命中に本稿をお届けに上がれず申しわけありません。ここに哀悼して捧げます。

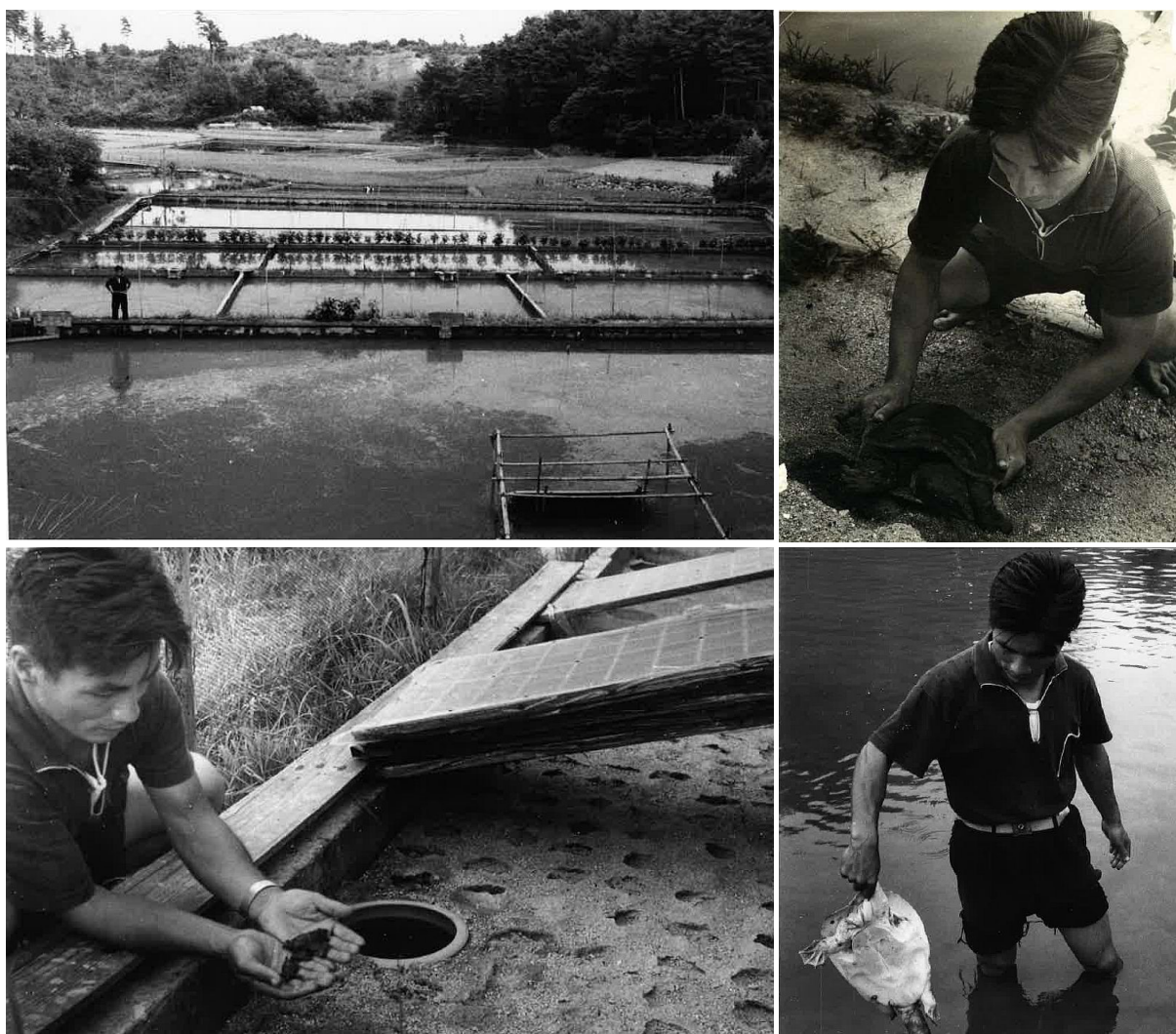


図1. 福田養魚場と福田泰昌氏
 左上: 福田養魚場
 右上と右下: 福田養魚場3代目 福田泰昌氏
 左下: 孵化場(孵化したばかりのスッポンの稚亀と福田泰昌氏)
 (いずれも1960年代初め/昭和30年代後半頃撮影)

謝辞

福田養魚場4代目の福田範史氏には粗校に目を通していただき、貴重な写真を提供していただきました。深く御礼申し上げます。

参考文献

- 秋山玄. 2005. 浜名湖のうなぎ・スッポン ルーツは深川千田新田一. P. 1-5. 江東区教育委員会(編). 江東ふるさと歴史研究(6). 江東区教育委員会, 東京.
- 後藤康人. 2015. 養鰻業経営体数の都道府県別推移(1954~2013). 日本爬虫両棲類学会第54回大会ポスター発表.
- 大村清友・栗橋信. 1927. すつぽんと亀. 文化生活研究会, 東京. 283p.
- 鳥取県中学校教育研究会道德部会(編). 1970. 養鰻に生きる. p.4-6. 郷土の人々. 鳥取県中学校教育研究会道德部会, 鳥取.
- 山口秀美(編). 1951. 福田源衛. p.34. 因伯人物誌 第二部. 因伯人物誌刊行会, 鳥取.

八丈島におけるクサガメ幼体の報告

笹塚 諒

108-8477 東京都港区港南4-5-7 東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科

Report of a Reeve's Turtle *Mauremys reevesii* juvenile from Hachijojima Island in 2015.

By Makoto SASAZUKA

Department of Marine Biosciences, Tokyo University of Marine Science and Technology, 4-5-7 Konan, Minato, Tokyo 108-8477, Japan.

伊豆諸島の八丈島は、周囲58.91km、面積69.11km²の大型火山島であるが、海洋島であるため独自の生態系を有している。島の経済の基幹産業は花卉園芸と観光であり、また農業に向かない火山性の土壌であるため、移入植物を積極的に利用してきた。このため非意図的に持ち込まれた外来生物が非常に多いことが指摘されている(湊, 2007)。八丈島の爬虫両棲類においては、在来種はオカダトカゲ *Plestiodon latiscutatus*、ニホンマムシ *Gloydius blomhoffii* の2種のみであるが(岡本・疋田, 2009; 柴, 2016)、多くの外来爬虫両棲類が確認されている(大野, 1994)。新たに確認される外来種は増え続けており、淡水カメ類もその一つであるが知見は少ない。

筆者は去る2015年6月14日に、八丈島において外来種であるクサガメ *Mauremys reevesii* をタモ網で捕獲したのでここに報告する。捕獲場所は、八丈島の中央部にある和泉親水公園(東京都八丈町三根)の水路で、捕獲個体は、背甲長55 mm程の幼いクサガメ1頭であった(図1)。同年2月に同所で2歳のクサガメがカゴワナで捕獲された記録から(後藤, 2017)、複数個体が和泉親水公園に生息していることが明らかになった。なお、当個体は撮影の後にその場でリリースした。

同じ海洋島であるグアムでは、外来生物の移入・定着が著しく、淡水カメ類においても7種の移入が確認され、少なくとも3種が定着したと考えられている(Leberer, 2003)。八丈島においても外来の淡水ガメが定着し増殖することは十分に起こり得るため、今後の動向に注視する必要がある。